

黒く、美しい翼が大きく空を裂いた。

仄暗い地下ではなく太陽が輝く地上だからこそ、その美しさは際立った。細やかな光の粒子を受けては羽根の一枚一枚が艶やかに煌く。大きく羽ばたいて鮮やかな軌跡を描く度に抜け落ちるそれは、地べたから彼女を仰ぐ者への施しの様にも見えた。

見れば誰もがその様に息を呑むだろう。

しかし残念かな。その姿には優雅さと呼ばれるものが圧倒的に足りていなかった。翼という物は滑空の為に使うのが主な目的であり、無駄にそれを上下させる為に付いているのではない。飛び上がり、十分な高度に達すればそこからは上昇気流に任せればいいのだから。だが地下と地上ではどうやら勝手が違うらしく、鳥は何時まで経ってもその翼を忙しなく動かしている。

そんなに急いでどこへ行くというのか――

誰かがそんな事を呟いたような気がした。  
勿論、彼女の耳には届かなかった。

間欠泉は止まる事無く湧き続けている。だがその勢いは、以前よりも確実に弱まっていた。

放り込むだけであつたという間に固ゆで卵ができていた程高温だった湯も、今では温泉卵を作るのが精々といったところである。

どこぞの迷惑な神様によつて引き起こされた、地上から地下を通じての異変の名残も、日にち葉によつて緩やかに終息していこうとしていた。

やはり幻想郷には平穩が似合う。

博麗の巫女である霊夢はそんな事を思いつつ、縁側でのんびりとお茶を飲んで小さく嘆息した。

陽射しは麗か。

こんな日は一日中何もせず、ぼうつとしていた。時間が流れるままに怠惰に過ぎ、空腹になれば食事をし、眠くなればそのまま意識を手放せばいい。

霊夢はただ穏やかな時間を望んでいた。

刺激なんてものは偶に存在する程度でいいのだ。

今日の夕飯は何にしようか、季節の野菜を使って天麩羅でも作ろうか。そしていつもよりも上等なお酒を少しだけ飲んで、虫の音でも聞きながら明日を待つのも悪くない。

そんな風に今日の終わりの事を考えている、まだ太陽は南中の位置にもないというのに。

だが、そんな彼女の時間は容易く打ち破られた。何者かによる高高度から神社の庭へと、垂直に突き刺さるような着地。その瞬間に、一陣の風がそれを中心に起こった。ここ数日掃除を怠っていたせいで、散

在していた木葉が舞い上がり、また土埃がその者の正体を視認させるのに幾許かの時間を持たせる。

しかしこのような出来事は何も初めてというわけではない。霊夢の交友関係はそこそこに広いとは言っても、ここまで傍迷惑な登場をする人物は一人しかいなかった。

「よつ、今日も暇そうで羨ましい限りだ」

時代遅れにも思える黒い衣装に身を包んだ魔法使い、霧雨魔理沙その人である。少しずれた帽子の位置を直しながら、衣服に付いた砂を払う仕事をした後、跨っていた箒の穂先を上にして地面を軽く突いた。

「あなたのせいで折角掃除したのに台無しだわ」

「嘘付け、どうせ今日は朝からごろごろしてただけなんだろう。頬つべたに板の痕があるぞ」

「失礼ね、そんな長い間寝転んだりしてないわよ。今日はずっと、お茶飲みながら座ってたんだから」

「ほう。ずっと、ねえ」

語るに落ちたな、と言って魔理沙は笑った。そのまま霊夢のいる縁側へと歩を進め、自分もそこへどっかりと腰掛ける。年頃の娘だというのに随分と大胆な所作だった。

「それで今日は何の用かしら？」

「おいおい、その前にお客にお茶の一杯も出さないのでこの神社は？」

「素敵な賽銭箱はあつちよ」

「森で採れた草なら入れてやってもいいけどな」

何時ものように軽口を言い合うと、魔法使いは履いていた靴を脱いだ。その背中に巫女が声をかける。

「あ、ついでお湯足してきて」

「いいぜ、それなら茶葉も足してきていいか？ 濃い方が好きなんだよな、紅茶はそうでもないんだけど」

「私は薄いほうが好きだから駄目」

「節約するほど生活に困ってるわけでもなからうに」

「清貧こそが博麗の美德なのよ」

「初めて聞いたぜ、そんな事」

「今、作ったからね」

そんな自分勝手な言葉に魔理沙は苦笑しつつ、急須を手に縁側を抜けて台所へと向かう。

きいきいと板張りの床が軋む音が、霊夢の耳に何故か心地よかった。